

間違いだらけのアムロ無双

ローファイト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アムロ無双です。

混ぜるな危険を体現したようなお話です。

アムロ無双は無双でも今連載中の奴は、ちょい悩んでまして……息抜きにギャグりたかつた。超息抜きです。

やつちまつた感が半端ないです。

期待しないでください。

続けるかもしれないし、これで終わるかもしれない。適當です。一応4話分まであるんですがね。相当修正しないとヤバすぎる。ちょい前に書いてた奴に直して出します。

こんなアムロ、アムロじゃないと私も思います。

やり過ぎだと注意されても仕方がないです。だつて、やり過ぎだから。

だから、生暖かい目で見てやってください。

目 次

アムロ・レイ参上!!

アムロのトラウマ

クワトロとアムロ

ミライを助けて超級魔王電影弾

カミーユ宇宙の彼方へレディー・ゴー

19 13 9 6 1

## アムロ・レイ参上!!

宇宙世紀0087年5月

アムロ・レイの元に、幼馴染のフラウ・コバヤシと戦災孤児で養子のカツ、レツ、キツカが戦災の難を逃れ訪れる。

年長のカツは世界情勢がひつ迫した状況で、未だこんな場所に引きこもつてアムロに対し、活を入れるためにこんな事を言う。

「地下にモビルスースが隠してあるとぐらい言つてください！」

しかし、キリつとした顔のアムロから返つて来た返事はとんでもないものだつた。

「そんなものは無い！俺がガンダムだ!!」

間違いだらけのアムロ無双の始まりであつた。

宇宙世紀0087年3月

一年戦争終結から7年が経過……。

再び地球圏では大規模な戦いの火ぶたを切つたのだ。

地球至上主義を掲げる連邦軍大派閥 テイターンズと、宇宙市民との融和を掲げる反テイターンズ派のエウーゴとの、後にグリップス戦役と呼ばれる戦争が始る。

宇宙世紀0087年5月

エウーゴの急先鋒であつたアーガマ隊は、連邦軍本部基地であるジャブローでティターンズの動きを察知し、凄腕パイロットであるクワトロ・バジーナ大尉はニュータイプの片鱗を見せる少年 カミュー・ビダンと共に地球に降り立つ。

しかし、ジャブローの情報はエウーゴ等反テイターンズ派を駆逐するための罠であつた。

命からがら逃げ延びたクワトロとカミュー達は、地球の反ティター

ンズ組織カラバと合流するが、ティターンズの追撃は激しく、ティターンズの可変モビルスーツに苦戦していた。

元ホワイトベースの兵士で現カラバの構成員であるハヤト・コバヤシが指揮する超大型輸送艦ワトロの百式とカミーユのガンダムMk-IIで対抗するも、可変モビルスーツアツシマーに追い詰められ、絶対絶命のピンチに陥る。

ブラン・ブルダーク少佐が操るアツシマーは、アウドムラの防衛を行っていた百式とガンダムMk-IIをモビルアーマー形態の圧倒的な機動力で抜き去り、アウドムラに迫る。

しかし、突如として民間輸送艦がアツシマーの斜め後方から進行を妨げんと現れる。

その民間輸送機のコクピットには一年戦争の嘗ての英雄 アムロ・レイが座っていた。

「何をする気だ、アムロ！アムロだと？」

百式を操るクワトロ……いや、シャアはその民間輸送機の動きとニユータイプの勘でアムロが乗っていると感じたのだ。

その民間輸送機がアツシマーに突っ込むかのように見えた……だが……

突如として、民間輸送機の操縦席のフロントガラスを突き破って、人影が飛び出してきたのだ！

その人影は白いマントをたなびかせながら、アツシマーに向かつて空中をクルクルと回転しながら舞う様に飛ぶ。

そして……

「超級！亜無呂蹴り————!!どうううりや————!!」

激しい雄たけびと共にその人影は凄まじい勢いで、アウドムラに向かつて飛ぶアツシマーに生身で蹴りを食らわしたのだ。

色々突つ込みどころはあるだろう。

空中を飛ぶアツシマーに人間が飛んで追いつくわけないとか、輸送船のフロントガラスを突き破れるわけが無いだろうとか……そもそも、生身の人間がモビルスーツに蹴りをかましたところでびくともし

ないとか……だが、そんな事はどうでもいいのだ！

その人影が放った渾身の蹴り、その凄まじい衝撃にアツシマーは耐えきれず、落下していったのだ。

とても人間になせる所業ではないが、目の前の現実として起ころる。

落下するアツシマーは海面ギリギリで何とか持ち直す。

アツシマーのパイロットブラン・ブルダーク少佐は何が起こつたのか理解出来なかつたが、これ以上の追撃は不可能と感じ撤退していく。

撤退するアツシマーのフレームには深々とへしやげ、人の足型がついていた。

相当の衝撃が加わつたのが見て取れる。

アツシマーを蹴り落とした人物は蹴りの反動を使い、アウドムラの後方格納ハッチに見事飛び移つり、白のマントをはためかせながらポーズをとり着地する。

その白いマントには達筆で流派東方不敗初代頑駄無と書かれているが見て取れる。

アウドムラの格納庫の壁には、民間輸送機から先にこの人物に投げ飛ばされたカツガエルが車に轢かれたような恰好でめり込んでいた。

クワトロはその光景を見て……

「……どうやら人違ひだつたようだ」

ズレるサングラスを元の位置に戻しながらそう呟いた。

クワトロ大尉……いや、シャア・アズナブルよ！

人違ひではない！！

彼こそが、一年戦争でRX-78-2ガンダムを駆り、白い悪魔とジオン兵に恐れられた、あの、アムロ・レイなのだ！！

何故こうなつたのか説明しよう！！

宇宙世紀0080年1月

アムロは一年戦争後、その功績により中尉に昇進、パイロット訓練官としてシャイアンに異動を命じられる。

この時アムロは16歳

その地はアムロの能力を恐れた連邦軍上層部が、彼を軟禁するための場所だつた。

たが、アムロはシャイアンに移動中に突如姿を消す

攫つた人物とは、東方不敗マスター・アジアと名乗る老人だつた。

してやろう！」

ギリナ高地で到底人間には不可能と思われる過酷な修行を強制的にやらされるアムロ。

この老人がどこから来て、なぜアムロを弟子に選んだのか、それはすべてが謎だ。

しかし、そんな修行が7年間続いた。

不敗マスター・アジアから免許皆伝を言い渡される。 遇酷な修行でアムロは臨死体験を1792回経験した後遂に東方

答えよ！アムロ！流派東方不敗は？！」

「全新的！」

「系列つ！」

二天破狹亂！」

「見よ！東方は紅く燃えている―――！」

行う。

! !

「はい！師匠!!」

東方不敗マスター・アジアはこう言い残して、アムロの元を去つた。  
すでに、一年戦争時のナイーブなアムロ少年の面影はどこにも無かつた。

背中には流派東方不敗初代頑駄無と書かれた白いマントを常に羽織り、頭には罵琉漢と書かれた白い鉢巻きを……

程なくして、アムロの消息を掴んだハヤトにより、フラウとカツ、レツ、キツカがアムロの元を訪れ……。

そして、今に至る。

間違いだらけのアムロ無双の幕開けだった。

## アムロのトラウマ

アムロはアウドムラでハヤト・コバヤシと7年ぶりの再会を果たす。

「アムロ、久しぶりだな」

「ハヤト、元気そうで何よりだ。なんというか、頼れる大人の雰囲気だ」

「そりやそうさ、あれから7年だぞ。嫁さんも貰つて子供も出来る。カツ達もいる。何時までも子供でいられないさ」

「俺は何時までもあの時のままさ」

「アムロは恋人とかいないのか？ 恋人を作つて結婚でもしたらどうだ。家庭を持つと大人になる」

アムロは何故かその言葉にピクつとし、下を向きながらソファーから立ち上がり、ハヤトに背中を見せる。

そして、かの有名なブライトポーズを取り。

「童貞でなぜ悪い！」

手をピンと伸ばし振り向くアムロは涙を滻のように流していた。

「はあ？」

「ああ、俺は童貞さ!! 童貞で何が悪い!! 一度も言わせるな!!」

「ア、アムロ？」

ハヤトは図らずしも、アムロのトラウマスイッチその1を押してしまっていたのだ。

「この7年間!! 修行の日々だ!! 毎日毎日死んだ方がましだと思う程の修行だ!! 目の前には不敵な笑みを浮かべる師匠だけだ!! 女なんて居ないし、触れもしないし、見てもいない!! 彼女なんて作る暇があるか――――――――!! 7年ぶりにあつたフラウは色ぽかつた!! なのに!! あそこがピクリともしないんだぞ!! もう、おれはきっとEDなんだ!! フラウと毎日ウハウハのハヤトに何が分かる!! ハヤトのばかやろ――――!!」

そう涙し、アムロは走り去つていった。

アムロはこの7年間女性との接触は一切なかつたのだ。

話しの相手は、東方不敗マスター・アジアのみ。

思春期の一人の情事も出来ない環境で、童貞を拗らせ過ぎてトラウマレベルまで達していたのだ。

「アムロ……いつたいお前に何があつた？」

ハヤトはそのアムロの背中を見て、アムロの前で二度と女の話をしないと誓つたのだった。

アムロはハヤトにトラウマを刺激され、格納庫の端で体育座りをして一人いじけていた。

そこにクワトロ・バジーナこと、シャア・アズナブル参上。「さすがだな。輸送機という機動性のないものをモビルスーツにぶつけるとは」

クワトロはそうアムロに話しかける。

アムロが生身でアツシマーを蹴り落としたという現実に脳が追いつかず、勝手に脳内でこんな感じで修正していたのだ。

「なぜ地球圏へ戻つて来たのです？」

「君を笑いに来たとでもいえば気が済むのか？」

「好きでこうなつたのではない」

「しかし、同情がほしい訳でもないのだろう？ならばカツ君の期待にも応えるアムロ・レイであつてほしい。それが私に言える最大の言葉だ」

「なぜ地球圏に戻つて来たのだ？」

「ララアの魂は、地球圏に漂つている。火星の向こうにはいないと思つた」

「ララア……ふん。ララアか……俺は修行中に1792回ララアに会つた」

「どういうことだアムロ？」

クワトロ、いやシャアはアムロのトラウマスイッチその2を押した事をまだ知らない。

「臨死体験で1792回、毎回ララアに会つてたんだよ!!三途の川か

ら手招きするララアをな!!だがな、ララアに近づくといつもいつも!!  
いつの間にかララアの顔が、し、師匠の顔に――――!!そして言う  
んだ!!『この馬鹿弟子が――』つて!!ぎや――!その修行は死ん  
じやうつて!!もういつそう殺してくれ――!!』

「あ、アムロ落ち着け」

「好きでこうなった分じやない!!わかるかお前に!!1792回だぞ!!  
臨死体験を!!毎度毎度!!ララアの顔が師匠に――!!」

アムロは全身震わせ、ますます縮こまり、何やらブツブツ言いだす。  
「ララアが師匠、師匠がララアで、ララアが師匠。ララアが師匠、師匠  
がララア……」

クワトロは思った。このアムロはもうダメだと。

## クワットロとアムロ

アムロはクワットロから受けたトラウマを何とか脱し、格納庫のモビルスーツを見回していた。

そこにカラバの構成員で年若い金髪美女ベルトーチカ・イルマがアムロに声を掛ける。

「あなたがアムロ・レイ? ふーん」

「はい、……僕アムロ」

久々の若い女性、しかも金髪美女ときた。

童貞を拗らせすぎたアムロはガチガチに緊張していた。

「とても強そうに見えないわね」

「はい、師匠よりも弱いです。確実に」

なぜか敬語のアムロ

「師匠って何? まあいいわ。よろしくね英雄さん」

ベルトーチカはこんなアムロに特に興味を示さず握手だけを求めた。

「よ、よろしくです。はい」

アムロの顔は真っ赤だった。

次にカミーユ・ビダンがアムロに話しかける。

「アムロさん!! さつきのどうやつたんですか!! 生身でモビルスーツを蹴り落とした様に見えましたけど! 流石は一年戦争の英雄です。」

カミーユは何故か目をキラキラさせていた。

「大したことは無い。君はまだ若い。臨死体験を1000回以上経験するような修行をすればなれるさ」

「ほ、本当ですか!」

カミーユ・ビダン。彼の感性も相当ズレていた。

「……ところで君は彼女はいるのかい?」

アムロはこんな質問をカミーユにする。

「いませんよ。それに今は戦争中ですし、平和になるまでは」

「カミーユ君！君とはいゝ関係を築けそうだ！」

アムロはカミーユとがつちり握手を交わす。

アムロは童貞仲間をゲットしたのだつた。

これがかつてのニュータイプと次世代を担うニュータイプの邂逅だつた。

アウドムラは百式、ガンダムMk-IIとパイロットであるクワトロとカミーユを宇宙に上げるべく、北米の打ち上げ基地へと向かう。

クワトロは宇宙に上がる準備を終わらせ、アムロに声をかける。

「アムロ、君も宇宙に上がるといい。君なら直ぐにでも勘を取り戻せるだろう」

「いや……地球でやり残した事がある」

「宇宙に上るのが怖いとでもいうのかアムロ」

「いいや、……一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「セイラさんつて、独身？」

「アルティシアには会っていない、結婚の噂も聞いていないな」

アムロは何やら考え方をしながらブツブツと呟きだした。

「なるほど、セイラさんは独身か……俺がセイラさんに告白する。そしたら恋人になる。童貞ともおさらばできる。出来ちゃえば結婚までいける。ん？という事は？」

「アムロ、何を言つている？」

「んん！……あんたは俺の義兄さんだ！」

アムロはシャヤアの両肩をガシッと掴み突然叫び出す。

「貴様にアルティシアはやらん!!」

「なにー!!今までセイラさんをほつたらかしにした分際で!!セイラさんは既に25歳だからな。ロリコンのお前は興味がなくなつたとばかり思つていた!!セイラさん25歳。俺はキツメのお姉さんが好きだから、セイラさんはドストライクだ!!」

「ふざけた事を!」

「明鏡止水!! ニュータイプモード!!」

アムロは突然叫び、突然黄金に輝きだす。

説明しよう。

この明鏡止水ニュータイプモードに達したアムロは、一切の邪念を捨て去り、心を落ち着かせる事によって、宇宙と一体化し、ニュータイプ能力を最大限に発揮できるのだ。この状態のアムロは触れた相手の過去と未来を見通せる。…らしい。

「な、なんだ？」

クワトロはサングラスのお陰で、輝くアムロを辛うじて直視出来た。

「見える見えるぞ!! シャア!! お前、アクシズでピンクっぽい髪の毛の14歳の子に手をだしたな!! しかもシスコンが行き過ぎて!! その子の似合いのツインテールをセイラさんカットにまで変えやがつて!! 本物のセイラさんがロリコン範疇を過ぎ去つたからって、無垢な少女にセイラさんの代わりを!!」

アムロがクワトロから見えたイメージは6年前、14歳になつたばかりのハマーンとデートをしている姿だつた。

「な……なな何の事だ?」

シャアは明らかに動搖していた。

「んん?? 6年後には、緑髪のツインテール13歳の少女を毒牙に掛ける未来が見える!! その子もセイラさんカットにするつもりか!! ああつ? このシスコンのロリコンのシスロリがーーー!!」

どうやらアムロはモビルスーツのコクピットの中でクエストイチャつつくシャアの未来が見えた様だ。

「貴様——!! 何を根拠に?」

流石のシャアも未来の所業にまで、関知出来るはずもない。

シャアはアムロの胸倉を掴もうとするが。

「人の恋路を邪魔をする奴は馬にけられてとつとと宇宙に行けーーー!!」

クワトロはアムロに蹴られ、百式のコクピットにすっぽり嵌り、そのまま百式を載せたシャトルは宇宙へと発射する。

この時シャアは思った。アムロとは何れ直接決着をつけないと。

そして、絶対アルティシアを渡さないと。

## ミライを助けて超級霸王電影弾

北米ではクワトロと百式しか宇宙に返すことが出来なかつたアウドムラは、カミーユとガンダムMk-IIを再び宇宙に上げるべく、香港へと向かつた。

その際：

「カミーユ、アムロさんにガンダムMk-IIを渡すべきよ」

ベルトーチカはカミーユにこんなことを言つた。

「アムロさんがそう言つたんですか？」

「いいえ、彼はかつての英雄よ。アムロならガンダムMk-IIをあなたより上手く動かせるわ」

「そんな事だろうと…、ベルトーチカさんはアムロさんが今までモビルスーツに乗つて出撃しなかつた理由を知らないんですね」

「な、なによ。普通のモビルスーツじゃ、アムロが納得出来なかつただけでしょ？」

「アムロさんの実力にモビルスーツが付いていけなくて、モビルスーツが発進する前にコックピットが壊れちゃうんですよ。もうネモが2機、リックディアスが1機、コックピットが破壊されて修理中です。流石にMk-IIを壊されるとまずいんです」

カミーユは残念そうにそう語つた。

いや、モビルスーツがアムロの実力についていけないのでなく、アムロはモビルスーツに乗ると、つい流派東方不敗の戦闘モードになり、腕力がモビルスーツ並みに上昇し、コクピットを破壊してしまうのだ。

「そ、 そうなのね」

ベルトーチカはカミーユの言葉に納得した。

その頃、アムロはミライとその子供たちが香港に逃げ延びてきていたことを知つたのだが……

ティターンズもその情報を知り、ミライと子供たちを人質に取つたのだ。

アムロをおびき寄せ、捕まえるために。

ティターンズのベン・ウツダーは香港湾岸の海上でクルーザーに人質のミライと子供たち乗せ、罠を張り、アムロ一人を呼び寄せる。

「これでアムロ・レイを捕まえれば間違いないなく昇進ものだろう。お前たち、奴が抵抗したのならば殺しても構わない！」

ベン・ウツダーは不敵な笑みを浮かべ、人質作戦の成功を確信する。

「……アムロ」

ミライは人質になりながら、一年戦争では弟のような存在であったアムロの顔を思い出し、心配をする。

そして……

「卑怯者ども、よく聞け!! ホワイトベースの母であるミライさんを人質にとるとは笑止千万!!」

雄叫びに近い大きな声が辺りに響く。

「ど、どこだ」

ベン・ウツダーとその配下の兵はその声の主を探すべく、あたりを見渡すが、誰もいない。

ここは海上だ。どこにも隠れる場所などないはずだ。

すると、湾岸方向から津波のような水しぶきがこちらに迫つて来るようになる。

「はいはいはいはいはいはい―――――――!!」

そんな掛け声とともに人影が水しぶきを高々と上げながら、海の上を猛烈なスピードで走ってきたのだ。

「な、なんだ―――!?」

そして、水柱をあげながら飛び上がり、クルーザーに飛び降り、人質のミライとその子供たちの前に立つ。

「あ、アムロなの？」

「もう、大丈夫ですミライさん」

そう、このクルーザーまで海上を走つて現れたのは、流派東方不敗

初代頑駄無と達筆で描かれた白いマントを羽織り、頭には罵瑠漢と書かれた白い鉢巻を卷いたかつての英雄、アムロ・レイその人だつた。

「き、貴様、どうやつて海を渡つてきた！」

アムロが海上を走る様子を見ていたはずなのに、こんな質問をするベン・ウツダー。

どうやら、人が海上を走るという行為を目前にしていたが、脳が全く理解できなかつた様だ。

「貴様らと話す口などもたん。ミライさんをこんな目に合わせやがつて!!」

アムロは縄で縛られていたミライとその子供たちをみやり、怒りの形相でベン・ウツダーを睨みつける。

「う、う、撃てーーっ！」

ベン・ウツダーの掛け声とともに、クルーザーに乗り込んでいたティターンズ兵10数名が一斉にアムロ達に銃弾の嵐を浴びせる。

5秒ほどで撃ち終えるが……

アムロは立つたままで、血しぶき一つ立てていない。

そして、アムロの手のひらからは無数の弾丸が零れ落ちる。

そう、アムロは素手で、嵐のような銃弾をすべて受け止めていたのだ。

「ひーーっ！」

「に、人間じゃない！」

ティターンズ兵共はそんなアムロに怯える。

その次の瞬間、目にも止まぬ速さでアムロはベン・ウツダー以外のティターンズ兵を素手で吹き飛ばし、全員気絶させたのだ。

「ただではすまさん。お仕置きが必要だ」

ベン・ウツダーに迫るアムロ。

「な、なにをやつてるモビルスーシ隊！」

腰碎けになつたベン・ウツダーがそう叫ぶと……

海中からモビルスーツ、ハイザック・マリンタイプが2機現れたのだ。

「罵——瑠漢!!!」

アムロは出鼻に先ほど素手で止めた多量の弾丸をいつの間にか集め、目にも止まらない速さで指で弾き飛ばし、ハイザック・マリンタイプの1機を撃ち抜く。

その弾の一部は何故かハイザック・マリンタイプの装甲を突き破り、メインカメラと関節部に直撃する。

そして、もう一機のザク・マリンタイプがアムロに掴みかかろうとするが……

アムロは素早く避け、空高く飛び上がりながら自らの鉢巻を外し……

「微淫夢！詐亜部琉!!!」

鉢巻を剣のように伸ばし、ハイザック・マリンタイプの一機の首に打ちこんだのだ。

すると、ハイザック・マリンタイプの首が拋げ、海中に落ちる。  
「とどめだ!!流派東方不敗が奥義!!超級！霸王!!電つ影———弾つつ  
!!」

アムロは自らの体を高速に回転させる。

まるで竜巻を纏つたような姿で、半壊したハイザック・マリンタイプ2機に突撃する。

超級霸王電影弾をまともに喰らつた半壊したハイザック・マリンタイプ2機は、空中に大きく吹き飛ぶ。

アムロも超級霸王電影弾で突撃した勢いで、上空へと飛ぶ。

「爆発!!」

次に空中で決めポーズをとりながら、雄叫びを上げるアムロ。

すると、空中に吹き飛ばされた2機のハイザック・マリンタイプは突然大爆発を起こしたのだ。

ハイザック・マリンタイプはどういう理論でそうなったのかは全く分からぬが、大爆発を起こし粉々となり、無残にも海へとその欠片が落ちていった。

「ひいいいーーーつ」

ベン・ウッダーはそんなアムロの姿に恐れをなして、自ら海に飛び込み逃げ出す。

それに倣つたかのように、意識を取り戻した残りのティターンズ兵も次々と自ら海へ飛び込む。

一情になつて如何

アムロは海へ逃げていくティターンズの兵士達を一斉してから、平然とクルーザーに飛び戻り、ミライと子供たちを拘束していた縄を指で断ち切った。

「ミライさん、大丈夫ですか？」  
「た、助かつたわアムロ、…………でも…………本当にアムロなの？」

その反応は致し方が無い。

又リ凡ざば、芝サ道分ニ

昔のナイーブな少年の顔はそこにはもう無い。

「一人の子供はミライの後ろに隠れて泣きじやくる。」  
まず、間違いなくトラウマとなつたであろう。

人質に取られたことと言ふよりも、鬼神のようなアムロの行いに

もはや、人の所業ではない。

しかも、とんでない力業で……。

「アムロ……連邦軍に酷い目に……もしかして、強化人間に……」

ミライは大いに勘違いしていた。

アムロは連邦軍研究施設で、強化人間に改造されてしまつたと勘違

強化人間に生身の肉体でモビルスーシュを粉碎する力など当然ない。

だが、改造という意味では合っているのかも知れない。  
ただし、そんな生易しいものではない。

東方不敗マスター・アジアという、マツドサイエンティストも裸足で逃げるようなどんでもない人物から、修行と言う名の肉体的にも精神的にも魔改造をアムロは施されたのだから。

無事ミライ親子を救つたアムロだが……。

「アムロ、いいお医者様を見つけてあげるわ」

ミライには強化人間と勘違いされ、その子供たちには怖がられる結果となる。

## カミーユ宇宙の彼方へレディー・ゴー

カミーユはホンコンシティで出会った薄幸の少女フォウ・ムラサメに惹かれていた。

フォウ自身もまんざらでもない雰囲気だ。

だが、彼女は連邦軍ムラサメ研究所で調整された強化人間。しかも、アウドムラの行く手を何度も阻んだサイコガンダムのパイロットだった。

過去の記憶を取り戻したいと思うフォウの心を利用され、無理矢理戦わさせていたのだ。

実際にはフォウを戦いに駆り立てるため、記憶を取り戻したいとう思いすらも作られたものだつた。

カミーユはフォウに惹かれながらも、敵として対峙しなければならないその運命に悩む。

そんなカミーユにアムロは声をかけ、話を聞き……こんな事を聞く。

「カミーユ……、彼女に惚れたのか？」

「そんなんじゃないです。ただ……気になるんです」

「恐らく彼女は強化人間だ」

「だからって……、だからってなんなんです！」

カミーユはアムロを鋭い目つきで見上げ、声を荒げる。

「カミーユ、もう彼女には会うな」「……ニユータイプの勘ですか？だからって、納得できるわけないじゃないですか！」

さらに声を荒げるカミーユ。

「ニユータイプの勘？違うな……予定運命だ!!」

アムロはカミーユの両肩をガシツと掴み、決め顔で声を大にする。

どうやら、カミーユはアムロの何らかの心のスイッチを押してしまつたようだ。

「な!?」

「明鏡止水!!ニユータイプモードッ!!」

アムロの体が突如として黄金色に輝きだす。

以前にも説明したが、再度説明しよう。

明鏡止水ニュータイプモードに達したアムロは、一切の邪念を捨て去り、心を落ち着かせる事によって、宇宙と一体化し、ニュータイプ能力を最大限に発揮できるのだ。この状態のアムロは触れた相手の過去と未来まで見え、予定運命まで見通せる…ハズ。

「ま、まぶしい」

カミーユは思わず目を閉じる。

「見える。見えるぞ！カミーユ！このまま運命に身を任せると、フオウ・ムラサメは数か月後に金髪リーゼントに撃たれ死ぬ。そしてお前自身は、全てが星に見え、頭がパツパラパーになって、幼馴染に迷惑をかけるぞ！」（TVアニメ版）

「なつ？」

「まだだ！もう一つ見える!!カミーユよ！性格を落ち着かせればその運命が覆り、将来幼馴染とハッピーエンドを迎えるだろう。但し！フオウ・ムラサメは数日後、凶弾に倒れ死ぬ」（劇場版）

「なつなな!?」

「そうだこれが予定運命だ。どちらにしてもフオウ・ムラサメは死ぬ。早く闇りを絶てば絶つほど、お前の将来は明るい!!」

「そ、そんな……馬鹿な……」

カミーユはアムロの真に迫る口調で語る予定運命を信じ始め、フオウの運命に悲嘆する。

「…………だが、そんな運命を覆す方法がここに一つある」

「アムロさん、それは何ですか!!」

もはや、カミーユはアムロの手の平の上である。

東方不敗マスター・アジアが得意としていた人心掌握術を巧みに使うアムロ。

「簡単な事だ。女を物にしたいのならば！その思いを叩きつける!!」

アムロはカミーユにこんな事を声を大にして言う。

「フオウとは……そんなんじゃ……ただ、惹かれているのは確かですが、彼女は記憶がないんです。そのせいで戦いを強要されて、俺は

……俺は彼女を…………

「このバカ弟子が!!」

アムロは、急に眼をクワツと見開き、まるで東方不敗マスター・アジアが乗り移つたかのような雄たけびを上げる。

いつの間にか、カミーユを弟子扱いだ。

「なつ!?

そんなアムロに圧倒され、一步下がるカミーユ。

「相手に記憶が無い? 強化人間? 敵と味方同士? そんなものはどうでもいい!! 拳を交わせ!! さすれば合わせた拳から相手の心が見えるだろう!! そして拳で語れ!! 自身の思いを拳に乗せ、彼女に知らしめろ!!」

アムロは拳を突きあげ、わななかせながら、熱く語りだす。

女性を口説くのに、口説く相手と拳を合わせ殴り合うなど聞いた事も無い。

何処の修羅の国のことやら。

さらに、童貞のアムロに女を口説いた経験などありようも無いのにこの自信。

どうやら全てはマスター・アジアの受け売りのようだ。

「!?

だが、そのアムロの熱に圧倒され続けるカミーユ。

「カミーユよ!! 伝授してやろう。我が流派東方不敗が誇る口伝を!」

しばらくアムロは口伝とやらを習得させるべくカミーユに特訓をつける。

そして……

カミーユとガンダムMk-IIを宇宙に上げるべく手段が見つからないまま、ホンコンシティを離れたアウドムラ。

それを執拗に追つて来るティターンズのアウドムラと同系の大型輸送艦スードリー。

スードリーを指揮するベン・ウツダーは遂に痺れを切らし強硬策を取り、アウドムラに特攻を仕掛けてきたのだ。

スードリーからはフォウが操縦するサイコガンダムとベースジャバーに乗るハイザック6機が発進。

一方、迎撃態勢を取るアウドムラはホンコンシティで戦力を落とし、カミーユのガンダムMk-IIのみとなっていた。

いや、迎撃発進するガンダムMk-IIの肩には、アムロが腕を組み、白いマントたなびかせながら堂々と立っていた。

「カミーユ!!いいな!!フォウとやらが駆るデカブツガンダムと拳で語れ!!邪魔者は俺が片付ける!!」

「アムロさん！ありがとうございます」

どうやらカミーユは本気でフォウと拳で語るつもりの様だ。

「ふふふつ!!ガンダム対ガンダム、これこそ師匠が語るガンダムファイト!!……ガンダムファイト!!レディーーーーーゴーーーーッ!!」

アムロは何故かテンションが高まり、雄叫びを上げながら、ガンダムMk-IIの肩から、6機のハイザックに向けて大きくジャンプする。

スードリーのモビルスーツ隊はガンダムMk-IIはサイコガンダムに任せ、6機のハイザックは予定通りアウドムラに向かった。陣形を組み進むハイザック、だが突如先頭の指揮官機の頭の人気が現れたのだ。

その人物が羽織るマントには『デカデカと流派東方不敗初代頑駄無と書かれ、白い鉢巻きには罵琉漢と……』

そうアムロ・レイが腕を組み悠然と立っていたのだ。

アムロは口上と共に黄金に輝きだし、明鏡止水状態に移行する。

「ガンダムファイトの邪魔はさせんっ!!……俺のこの手が輝つて掴む！敵を倒せと！囁きかける！流派東方不敗が秘技!!十二王方牌!!大車併つ!!（じゅうにおうほうはい!!ファインファンネルッ!!）

説明しよう。流派東方不敗秘技、十二王方牌大車併とは……。

自らの気を練り、気の分身体を12体出現させ飛ばし、遠近問わず

敵を攻撃するんじゃない技だ。

右手の平を前に突き出し、円を描くように動かすと、円に沿つて梵字が12浮かび上がる。その梵字からは次々と人影が12体現れ、6機のハイザック目にも止まらぬスピードで襲い掛かつたのだ。

その人影は本来アムロの姿か、愛機RX-78ガンダムの姿を象るはずなのだが、そこはニュータイプ。過去に戦った英靈（強敵とかいて友と呼ぶ）たちの姿を象っていた。

要するに、ランバ・ラル、ドズル・ザビ、マ・クベ、ガイア、オルテガ、マツシユ等、とんでもないおつさん達の姿をした人影が、ハイザック達に襲い掛けかかるのだ。

ハイザックのパイロット達は恐怖と混乱の坩堝に入り、さらに実際にダメージを受け、次々と海に落ちる。

「帰山笑紅塵！」

ハイザックの撃墜を見届けたアムロは、ハイザックが乗つていた一機のベースジャバーに飛び移りながら、そう叫ぶと、過去の英靈の分身体たちはアムロの体に吸い込まれ、元の体内エネルギーである氣に戻る。

おつさん共がアムロの体に吸い込まれるその姿は、余りにもシユールが過ぎるだろう。

ガンダム史上、亡くなつた美女たちが主人公の力になるために、現れる事があつたとしても、むさいおつさん達が現れた事は無い。これは見た目も気分も良くないため、今回限りで許してほしいところだ。

一方カミーユは、フオウが乗るサイコガンダムと対峙していた。

アムロのアドバイス通り、サイコガンダムにガンダムMk-IIで殴り合いを仕掛けたのだが……、サイコガンダムとは倍程の体格差がある上、海上空中での戦闘だ。

サイコガンダムは飛行可能だが、ガンダムMk-IIはベースジャバーに乗つた状態での戦闘となり、ガンダムMk-IIは圧倒的な不利に陥り、サイコガンダムの両腕に捕まれる。

だが、カミーユはガンダムMk-IIコクピットを開き、サイコガン

ダムのコクピットへと……フォウに拳ではなく、自分の言葉で自身の辛い過去と今の想いを直接語り掛けたのだ。

フォウはそんなカミーユの温かい心に触れ、決意する。

カミーユを何としても宇宙に上げなければと……。

フォウはティアーンズを裏切り、スードリーにあるシャトルブースターをカミーユに渡すために行動に移ろうと、カミーユを押し出し、サイコガンダムのハッチを閉める。

このままだと、アムロの明鏡止水ニュータイプモードで見た予定運命の原作通りの展開が待つてているだろう。

この後フォウは、ベン・ウッダーに撃たれて死ぬか（劇場版）、もしくは撃たれるも辛うじて命拾いするが、さらに再強化されカミーユとの記憶も奪われ、数ヶ月後に金髪リーゼントに撃たれて死ぬか（TVアニメ版）……。

だが、此処でカミーユは閉まつたサイコガンダムのコクピットの前で、自分の素直な気持ちをフォウに伝える。

「フォウ、君が好きだ……」

カミーユのその声でサイコガンダムの動きが止まる。

「カミーユ……うれしい。でもあなたを宇宙に帰さなければいけない。宇宙にはあなたが必要だから……」

そんないい場面で白いマントをたなびかせたアムロが登場！

「カミーユ!! そんなものか!! そんな気合では女一人を助ける事も出来んぞ!!」

いつの間にかサイコガンダムの肩に乗つていた。

「アムロさん? ……何を?」

「カミーユよ!! 今こそ、流派東方不敗のあの口伝を!!」

そのアムロの声にカミーユは一瞬躊躇するが、サイコガンダムのコクピットに顔を向ける。

「…………フォウ、君が好きだ。……フォウ、お前がほしい―――一つ!!」

そして、とんでもない事を叫ぶ。

これこそが、アムロが東方不敗マスター・アジアから教えてもらつ

た絶体に失敗しない女の口説き方その1だつた。

多分、一番弟子である熱血赤マントもその教えを受け継いだハズ。

アオウは……

「だめよカミーユ…………貴方は…………宇宙に行かなくては…………」

たか

「ちかーーーーう！」そこはカンタムから飛び出して  
ユと抱き着く場面だ!!」

アムロはそんな事を言いながら、サイエガンタムのエクビットハッチを強引に剥がし、フオウを引っ張り出し、ガンダム Mk-IIの開いたままのコクピットハッチに立つカミーユに向かて、放り投げたのだ。

カミーユはフオウを何とか抱き留めるも、よろけ、フオウを抱いたまま、ガンダムMk-IIのコクピットに倒れ込み、ハツチがそのまま閉まる。

アムロはその様子に満足げに頷いていたが、操縦者を失ったサイコガンダムはコントロール不能となり、落下し始めようとしていた。

サイニカンタムに捕まればまたつたカンタムMk-IIはその隙に脱する。

アムロはサイニカンタムの二ヶヒットに乗り込み再起動を試みる。

脳波と連動し、起動を開始しだしたのだ。

これは……いい感じだ。だがこいつは邪魔だ！」

アムロは何故だか 操縦ニンソルことリニアシートを無理矢理引っこ抜いて、コクピットの外に放り出した！

アムロは広くなつたエケビツテに立ち、流派東方不敗の基本の型の構えをする。

するとサイコガンダムも運動し、構える。

「これが……師匠の言つていたモビルトレースシステムか？」

唯のサイコミュシステムだが、アムロのニュータイプ能力と明鏡止水がミックスして、操縦者の意思をほぼ100%反映させたのだ。

「これならば！……カミーユ！お前は宇宙へ行け！俺がお前を宇宙へと送り届けてやる！」

「ア、アムロさん？」

「彼女をしつかり抱き留めておけよ！ちゃんとシートベルトを締めておけ、口を開けるな、舌を噛むぞ！いくぞ！」

アムロが操縦するサイコガンダムはガンダムMk-IIの足を掴みながら、荒ぶる鷹の構えをする。

「な、何をするつもりですか!!」

「流派!! 東方不敗が奥義!!」

アムロはそう叫びながら、ガンダムMk-IIをぐるぐると回し始める。

「超級！霸王つ!! 電！影ツ弾!! はい―――――、破つ!!」

そして、竜巻の様に高速回転するガンダムMk-IIを気合いの掛け声と共に空高く打ちだしたのだ。

竜巻と化したガンダムMk-IIは空の彼方へと消えて行った。

恐らく、宇宙へと上がつただろうが……果たして、中のカミーユとフオウは無事だろうか？

いや、これでフオウが死に至る予定運命は回避できた可能性が高いが、これで良かつたのだろうか？

宇宙にはカミーユに惚れている幼馴染のファがいる。

そのうち二人目の美人強化人間のロザミア・バダムとも会うだろう。

カミーユの明日はどう向かうのだろうか？

カミーユを宇宙に帰したアムロは……

「このガンダムをグレート（最高）ガンダムと名付けるとしよう」

師匠である東方不敗マスター・アジア並みの残念なネーミングセン

スである。

だが、アムロは念願のモビルファイター……いや、モビルスーツを手に入れる事が出来たのだった。  
そして、アムロの明日は……。